

多人数授業でコミュニケーションを図る一つの試み

大学教育開発研究センター長 吉村尚久

教養科目の授業（講義）で毎時間、質問は無いかと聞いてみるが、質問が出てくることは皆無に近い。新生生が多いからかと思って見たが、そうばかりでもないらしい。みんなの前でしゃべることを躊躇しているのである。したがって、口を開かないからと言って質問が無い訳ではなく、その証拠には紙に書かされると沢山の質問が出てくる。また、少し慣れてくると、授業のあとで個人的に質問にきたりする。平成5年度から教養科目を担当しているが、上記のような状態であるので、平成6年度以降、出席票を兼ねてB6版の紙を配り、質問・意見・感想・要望等を書いて貰っている。それらを整理し、質問には簡単な回答や参考文献の紹介、感想や要望には気の付いたコメントを記入し、ワープロで打って、プリントにして次の授業時間に配布している。文章の長いものは文意・雰囲気を見失わないように注意しながら要約するが、学生から出された声や質問とコメント及び回答を合わせて、B4版1枚に約4,800字を詰め込んでいる。

この方式は、実際にやっている教員が身近にいて、日頃から効果があがることを見聞きしていたので、やる気になったものである。口頭での質疑応答の代わりに文字でコミュニケーションをはかり、双方向化の努力をしている訳である。なかにはどうかと思う質問や意見も垣間見られるが、鋭い質問や成程とうなずかされる意見や感想が多い。どのような内容が書かれているか興味があるので、授業が終わり部屋に帰ると、すぐに目を通し、気付いたことをその用紙にメモしている。昼休みを挟んで3時限には専門科目の授業があるので、昼休みが短くなったこともあり、つい昼食を抜いたり、授業に遅れてしまったりすることもある。読むのだけなら苦にならないが、ワープロで打ち込むのには時間と労力を必要とする。また、文書として残るので、間違っていてはまずいと思い、資料に当たり直したりするので、それなりに大変である。出張などがあると前日の夜にワープロを打って、当日の朝にプリントを作っている始末である。この様に泥縄のことも多いが、4年間1回も欠かしたことがない。学生からは「よく質問や感想を書けという講義は多いが、この様にまとめてプリントにして配布してくれたり質問にきちんと答えてくれる先生は少ない。先生の熱意が感じられて、自分もきちんと聞いて学ぼうという気持ちになる。」といった感想が寄せられている。

入学後間もない頃の学生の要望には、「どこが重要か、どこがポイントか分かり難いので、はっきり示して欲しい。」とか「黒板をもっと整理して書いて欲しい。」あるいは「テストの形式が分からないと勉強の仕方が分からないからテストの形式を教えてください。」との声があり、「試験はプリントの内容を覚えておけば良いのか」との質問も出る。高校や予備校では、大学受験に合格させるために、重要なポイントは○△で、これだけは絶対に覚えておけ、と指導しているのであろうか。学生の声から判断して、その余韻が感じられる。“勉強とは覚えること”と思っている人は意外と多いようで、単位を取るには覚えることが第一であると考えているようである。しかし、興味もないのに無理して覚えてもすぐに忘れるのではなからうか。入学当初、自分のことを生徒と呼ぶ、この種の学生を大学教育を受けるに相応しく変身させるには、それなりの教育をしないと時間的効率が極めて悪いと思われる。要するに、“学ぶ”ためのイロハつまり“学ぶ”方法についてのリテラシーが必要なのである。

学べない人間には三つのタイプがあると言われている。すなわち、無気力型、ガリ勉型及びハウツウ型の三つであると指摘されている。無気力型はやる気がないので、学ぶ気がないことは誰でも分かる。

彼らにとっては、“学ぶ”ことは暗記であるらしい。ハウツウ型は“何故”と言う疑問を持たず、やり方の問題に解消してしまうので、“学ぶ”必要がない。ガリ勉型は、自分では良く勉強している積もりなので始末が悪く、自分のやっていることを広い視野から見ることができず、世の中との関連や位置づけなどは無意味だと思って考えてもみないので、本質的には無気力型と同じとされている。

半年間の授業で、最初の頃は学術用語の解説を求める質問が多い。大抵の術語は専門分野の事典を引けば出てくるので、図書館を利用するように指導している。また、本筋の話でなく、余談的に話したことや実例として紹介したことと関連した質問も多い。授業の内容と無関係の質問もある。これは何か書かなければいけないと思って書くのかも知れない。短絡的理解や意味の分からない文章を書く学生もいるので、他人に分かる文章を書くように指導しなければならない。15回の授業の半ばを過ぎる頃になると、質問の数が急に多くなる。その内容も授業の本筋に関係し、説明を端折ったり一寸難しかったかなと思う所に集中する。また、教科書的な事例だけで終わらせないで、なるべく生データをそのまま使うようにしているので、その中味に関するものが多い。生データを使うことは、事柄を難しく感じさせる向きもあるが、実際の自然の姿を見る上では必要であるし、そこから因果関係を抽出する勘所を少しだけでも味わって欲しいと思うからである。また、教科書的なものばかりでないとところに新しい発展の芽があることを感じられれば、言うこと無いが、そこまで考えての質問は極く少数である。

講義の内容に関して質問をするには、何が分かり、何が分からなかったのかが分かる必要がある。そうでないと疑問・質問が出てこないものである。何も分からなくては具体的なことを質問する仕様もないのである。そう言った意味では、具体的な質問が出てくることは授業内容をかなり理解しているか理解しようとしている現れと受け取ることができる。

授業の中で簡単な数式を出すことがあるが、文科系学生には生理的拒絶ともいうべき反応が見られる。学生の感想によると、式が出てくると難しいと感じ、式がないと内容的にはかなり高度のものでも分かり易かったと感じている。高校の段階で文系と理系に分け、文系だから物理や数学は必要ないと指導している弊害が出ていると思う。理科嫌いを助長している教育の仕方にも大きな問題がある。例えば、「高校でもやったが、今日のように分かり易くやらなかったので、語句は覚えたが理解できなかった。今日やっと何のことか分かった。」と書いている者もいる。一方、「論理の進め方がなんだか推理小説みたいで楽しかった。文系の人には数式が出てくると分からないと言うが、文章で説明されるより式を見た方が分かり易いこともあるので、式があるから分からないなどと余り言わない方がよいと思う。」と書く文科系学生もいるのは心強い。

夏休みに「郷土の自然—とくに地盤の生い立ち—」を調べ、レポートとして提出する課題を出している。100人を越す学生なので、全員と言う訳にはいかないが、成果を9月の授業で発表して貰っている。文科系の学生も、いろんな資料にあたり、現地に足を運んで、自分の言葉で発表する学生もいる。発表を聞いている学生からはその場での質問や意見は出ないが、出席票の紙には沢山のことを書いている。その内容を見ると、教員の場合と違って、同じ学生だと非常に大きな刺激を与える様である。例をいくつか挙げると、「発表を聞いて、自分とは異なった視点からの話で、とても素晴らしい発表だった。特に地盤のでき方が細かく調べてあって勉強になった。」「人の発表を聞くと、話し方やまとめ方も参考になって良かった。」「凄く良く調べてあって、それに比べて自分のは情けない。」「自分もそうなると思うが、発表している当人が何を言っているのか分からないのは一寸恥ずかしいと思った。」などである。

以上、多人数の授業で主に文書を通して学生とコミュニケーションを図る一つの試みを紹介させて頂いた。

本研究年報には、授業での工夫や教材開発など多くの実践例や授業改善の取り組みを掲載することができた。大学教育改善の一助となることを念願している。